

月刊

地域保健

9
2010

●FACE 2010

秦野市福祉部高齢介護課課長補佐

石川貴美子さん

●OPINION! 保健師さんへ

「なくそう」子どもの貧困

全国ネットワーク共同代表

千葉明德短期大学保育創造学科講師

山野良一さん



JULI
2010
SEPTEMBER

●第2特集

●第1特集

発達障害者支援の新しい流れ
歯科保健で地域をつくる

Face
2010

その仕事は《何のために》あるのか問い続ける

「考える保健師」が目指す利用者目線の介護

秦野市福祉部高齢介護課
課長補佐

石川貴美子さん

取材・文 編集部
photographs : Sei Kamiyasu

秦野市は神奈川県中西部に位置する

人口17万人の地方都市。急行に乗れば都心から1時間ほどの距離だが、少し足を延ばせばもう観光地の箱根である。その秦野市から毎週土曜日に神奈川、東京を通り抜け千葉市にある千葉大学大学院まで、片道2時間半をかけて通う保健師がいる。

石川貴美子さん。秦野に生まれ、秦野で育った、生粋の秦野っ子である。

「大学院に行くことになったのは日本公衆衛生学会を通じて知り合った吉本照子先生（千葉大学大学院看護研究科地域看護システム管理学教授）にお声をかけていただいたからです。以前から大学院で学んでみたいと思っていたので、一昨年、社会人枠の院生募集で声をかけていただいたとき、受験してみようと思いました。職場の課題解決に向けて計画を立てて実践し、そのプロセスを分析・評価したいと思っています」

ます」

現役の保健師が休職せずに大学院に通うのは、かなりハードなこと。それも片道2時間半を通い続けるというのは並大抵のバイタリティーではない。何が彼女をそこまで駆り立てるのだろうか――。

先輩がいなくなる！

石川さんは保健師歴24年。まだ40代半ばだが市の保健師ではすでに最年長である。現在は高齢介護課で介護認定の仕事を担当している。

もともと看護職への強い志向があったわけではない。高校時代には「資格をとるなら教職か看護職」くらいの軽い気持ちだったという。高校卒業後、筑波大学医療技術短期大学部から神奈川県立看護教育大学校へと進み、地元秦野市役所に入職（保険健康課）し



たのが1986年。

先輩保健師は5人いた。秦野市は長らく1人保健師の時代が続いていたが、老人保健法が施行された83年から毎年保健師を採用し続け、そこまで増えていたのだ。入職時は、県との人事交流で保健所からは2人の保健師が向かって来た。石川さんも、はや2年目から神奈川県厚木保健所に出向することになった。

「発達障害」という言葉はようやく社会一般にも知られるようになってきたが、その実態を正しく知る人はまだまだ少ない。保健師など支援する側においても捉え方にかなり濃淡があるのが実情である。一方、専門家の間では、アスペルガー障害、ADHD、LDなどの分類に重きを置くよりシンプルな評価尺度に基づいて対応することが主流になってきた。国も法整備の中で発達障害者支援をより具体的に位置づける方向で動き出したところだ。

今月の第1特集では発達障害者支援の新しい流れについて解説し、現場で発達障害者支援にかかわる保健師たちに指針を提示する。

P16 [Interview]

当事者のきょうだいや友達は専門家顔負けの“技”を持っている

《日語正文 発達障害対策専門官に聞く》

P24 いま発達障害をどうとらえるか

◎独立行政法人 国立精神・神経医療センター 精神保健研究所 神尾陽子

P32 発達障害児者支援に向けた効果的な乳幼児健診のあり方

◎中京大学現代社会学部 辻井正次

◎浜松医科大学 子どものこころの発達研究センター 中島俊思

P40 【事例】「充実」から「平準化」へ

◎舞鶴市福祉部 瀬野勝久

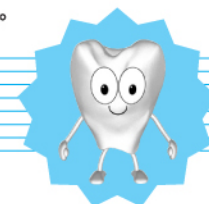
第1特集

発達障害者支援の新しい流れ

共通の評価尺度の普及で
同じ視点から
継続的な支援を

歯科保健で 地域をつくる

歯科・口腔の問題は全身の健康や精神機能にも大きな影響を及ぼすことが知られており、介護予防や特定健診・特定保健指導においても重要なポイントを担っている。第2特集ではからだの小さな部位である歯科・口腔の健康が、地域づくりにまで広がることを説き、実践事例を紹介する。



P50 地域で取り組む二大疾患の予防

◎福岡歯科大学 筒井昭仁

P58 【事例】 地域における歯科からのホームレス者自立支援の取り組み—調査、健康教育、情報発信、そして情報の共有

◎NPO 法人ウェルビーイング 岩井 梢、西本美恵子

P64 【事例】 自治体におけるヘルスプロモーション的 歯科保健の取り組み—継続の鍵を握るのは「対話」

◎鹿児島県南薩地域振興局保健福祉環境部（加世田保健所） 栗野孝子



2年目の難しさを 痛感しつつ 地元保健師として 何ができるか思案する日々

仕事のプロとしてのコミュニケーションとは…

田村佳奈美さん

●長野県下高井郡山ノ内町健康福祉課健康づくり支援係



▲担当している地区は温泉街でなく農業人口が多い



取材・文・写真／西内義雄（医療・保健ジャーナリスト）

「本当に私で大丈夫でしょうか？」

ひよこ保健師の取材はさまざまなルートから推薦をいただいてご本人にアポイントを取ることが多い。意欲満々で了解していただくこともあれば、迷った末に辞退される人もいる。

今回の主人公、田村さんは当初、取材を受けることに戸惑いがあったようだ。しかしその後のやり取りの中で「せっかくのお話、光栄に思っています。そして、すごい保健師ではなく、私のような保健師もいるということを伝えるために取材を受けさせてもらえればと思います」と了解をもらうことができた。

とても素直な人だと思った。保健師として一生懸命頑張ろうとしているのだけど、まだ自分の進むべき道がよく見通せず、試行錯誤を繰り返している最中だということも伝わってきた。こうして日々迷い、悩みながらも前に進もうとしている姿も、多くの先輩たち

が通ってきた道であろう。

外湯で生活してきた 保健師です

山ノ内町は長野市の北東に位置し、長野駅から長野電鉄でおよそ1時間。終着駅の湯田中が町の中心だ。ちなみに、山ノ内という町名にピンとこなくても、湯田中・洪温泉郷や地獄谷・野猿公苑、志賀高原のある町といえれば分かる人も多いはず。ここで採用2年目を迎えたひよこさんが田村佳奈美さん、23歳だ。地元で生まれ育ったとのことだ。「私は温泉場で育ち、外湯で生活してきましたんです」

と粹な自己紹介も忘れない。「外湯で生活」の意味は、地区にはそれぞれ外湯と呼ばれる公衆浴場があり、地元の人からは昔から自宅に風呂を持たず、最寄りの外湯を利用してきたことを指している。田村さんも高校を卒業するまで自宅に風呂はなかったという。しか



▲公衆衛生専門学校時代のスナップより

も4人きょうだいの末子というから、温泉街を歩く姿はきつと目立っていたことだろう。保育園のころ、将来の夢はと聞かれて「看護師さん」と答えた記憶があるが、漠然とした憧れのひとつだった。成長するに従い興味は変わっていく。「小学校のころからなぜか保健室が好きで、養護教諭に憧れていました。中